地域で輝く女性起業家サロン（第５回）　議事概要

日時：令和７年４月24日（木）15：40～16：50
場所：こども家庭庁　三原大臣室

【出席者】
池下　奈美　　制服バトンタッチストア　リクル　代表/NPO制服バンク石川　代表
大西　千晶　　日本農業株式会社　代表取締役/一般社団法人日本農業　代表理事
田中　美華　　株式会社リモットさん　代表取締役
山形　彩子　　株式会社MATSURIKA　代表取締役
小安　美和　　株式会社Will Lab　代表取締役
横田　響子　　株式会社コラボラボ　代表取締役
吉岡　佐和子　株式会社山陰合同銀行　代表取締役専務執行役員/鳥取営業本部長
三原　じゅん子　内閣府特命担当大臣（男女共同参画）
黒瀬　敏文　　内閣府政策統括官（共生・共助担当）

１．開会

２．挨拶
（三原大臣）
・今回が５回目のサロンであるが、今日も非常に活躍されている皆様にお集まりいただき、感謝。
・地方で働きたい仕事になかなか出会えないという女性が多く、一極集中しがちであるということをどうにかすべく、女性で自らこういう仕事がしたい、起業したいという方を規模などにかかわらずぜひ応援したいという思いが強くある。そのためには何が必要なのか、障壁は何なのかということを伺っているところ。

〇起業家の皆様より自己紹介
（池下氏）
・2017年に、石川県で初めての制服リユース店、制服バトンタッチストア　リクルを立ち上げ。そこでは安価で制服を販売しているが、それでも購入ができない、制服を無償で譲ってほしいという相談や、行政からの支援の依頼が多く入るようになり、リクルとは別に任意団体を立ち上げて、NPO制服バンク石川としても活動をしている。譲り受けた制服をきれいに丁寧にメンテナンスし翌日から着られる状態にして、制服を必要としている次の方へバトンタッチするという役割をしている。

・最近では、能登半島地震で被災された家庭への支援活動として、全て無償で制服の支援を行ってきた。制服の支援だけではなく、学習支援、食材支援など、生活全体を支えるサポート役を続けてきている。また、支援したい企業や個人の方と、被災された方や困窮家庭で支援を求める方との橋渡しとしての役割も務めている。

（大西氏）

・京都府亀岡市・南丹市の地域で有機農業の事業を大学在学中の二十歳のときに起業、今は就農・起業15年目。稲作と畑作、農業を中心に、６次産業ということで加工事業とスープの専門店の展開、農福連携の事業を行っている。
・自分自身が学生のときに、いわゆるゆとり世代、さとり世代などと言われる世代に育った。そのときに環境課題や貧困課題について考える時間があり、2050年には自分も60歳ということで未来を憂いていたが、農業に出会ったときに、レジリエンスに繋がる食、防衛、自然資本生態系の拡張など、さまざまな課題解決につながると希望を持ち、大変な業界ではあるが楽しく仕事をしている。
・プライベートでは、小学生２人の男の子の母。周りのサポートを受けながら子育て中です。亀岡市とは地域包括連携協定を締結し、自治体とも連携して地方創生に一緒に取り組んでいこうということで活動している。また、関東の大手食品スーパーのベルクの社外取締役を４期目として務めており、食の川上から川下までというところで活動している。

（田中氏）

・株式会社リモットさんは、オンライン上で完結するような事務代行業務を中心に提供している会社。スタッフは50名ほどで、うち４割が青森県内、そのほかは日本全国・海外に在住している。
・大学卒業後は東京で暮らしていたが、25歳くらいのときにこどもが生まれ、Uターンして青森で育てたいという思いがあり、青森でもできる仕事を自分で作らなくてはいけない、と考えたのがきっかけ。当時、オンラインを活用した仕事というのはあまりメジャーな働き方ではなかったが、そこでリモートでの働き方を突き詰め、仲間も増やしたことで会社ができあがった。
・地方と東京で働き方や女性のキャリアが全く違うという感覚もある。

（山形氏）

・東京都出身で、都立学校の養護教諭として15年間勤めていた。こどもの体調が悪くなったことをきっかけに、仕事を辞めて、縁もゆかりもなかったが移住者の受け入れ体制が良く、空気と水がきれいな岡山県真庭市に移住した。
・地域おこし協力隊を３年間務めたのち、2017年に石鹸を作る会社を立ち上げて化粧品製

造業を取得した。養護教諭時代にアトピーの子のためにハーブなどを使った無添加の石鹸を作った経験があったことと、真庭市でとれるラベンダーやハーブなど自然からの癒しを都会の疲れた方たちに届けたいという思いから、石鹸製造とオンラインショップを営み８年目となる。

〇先輩起業家、起業のサポートに従事する立場として本サロンに加わっていただいているコアメンバーから挨拶

（小安氏）

・45歳で起業、自治体や企業、NPOと連携し、女性の就労支援とリーダー育成を行っている。都市部と地方で働く環境に格差があることを社会課題として、自身の企業でのビジネス経験も活かしながら地域で働き方改革や職場環境の改善をコンサルティングして回っている。青森でもここ２年程、「女性はもっと稼ごう」という取組を行っている。

（横田氏）

・20年近く女性経営者の事業継続支援を行っている。
・山形さんのように、女性社長の中でも、子育て支援に適しているという観点から縁もゆかりもない地域に行くという方がいるが、素敵だと思う。

（吉岡氏）

・島根県と鳥取県を営業基盤とする、銀行員。
・自分は組織にいるので、起業された方の御意見を伺いつつ、金融機関としてどのようにしたら皆さんが起業しやすくなるのか、どのような手伝いが必要とされているのかを教えていただければ、さらに地域の方のお手伝いができると考えている。

３.意見交換

〇女性の起業が促進されるためにどのようなサポートが必要か

（池下氏）

・2016年、自身の息子が制服のズボンを破いて帰ってきたことがあった。１万円以上する制服を破いてしまってどうするの、と叱った一方で、制服のリユース店、制服が集まる場所があれば自分も助かるし、同じように困っている人は他にもいるのではないかと考えた。石川県の小学生は制服の着用率が84％ととても高いが、制服を循環する仕組みがなかった。おさがりを回そうと思っても近所や親戚同士、兄弟間くらいしか回せず、譲り先がなかったり、一方で誰かに譲ってほしいがお願いできる先がなかったり、という家庭が多かったので、制服のおさがりが集まる場所があれば皆が助かるのではないかと思い、制服のリユース店を立ち上げようと考えた。
・いざ制服のリユース店を開こうと思い、商工会議所や銀行の窓口、市役所などを巡った

が、制服はブルセラ、アダルトという扱いをされ、相手にされなかった。しかし、以前勤めていた職場の社長に相談したところ、「女性はお金をかけて会社を立ち上げると首が回らなくなる、お金をかけずにやってみろ」と言われ、場所も無償で貸してくれた。最初は全くお客様も制服も集まらなかったが、1年後には多くの制服が集まるようになり、そこからテナントを借り始めた。

・ISICO（石川県産業創出支援機構）で女性起業家が集まるセミナーがあったので行ってみたところ、そこでウェブデザイナーを目指していた女性に出会った。その方が協力を申し出てくれ、HPや名刺の作成などのサポートをしてくれたことで、リクルについて自信を持って、様々な人に説明して回ることができるようになった。起業について思いを受けとめて、寄り添ってくれる存在が欠かせないと感じた。

・女性の起業を後押しするには、共感してくれる相談相手と小さい規模で始められる場所、孤立しないようなつながり、縁がとても必要だと感じる。女性が安心して一歩踏み出すには場の支援と心の支援の両方が必要。

（大西氏）

・２つの側面からお話する。

・１点目は事業面。農業を始めたときは苦労の連続であり、事業継続のために６次産業をやろうと思ったものの、加工や商品化のノウハウがなかった。そのときに「関西を元気にする会」で開催された「未来の社長プロジェクト」に出場し、優勝したことで、農業への思いなどに感銘を受けてくださった企業からテストキッチンを借りたり、加工のアドバイスやHACCPなどについての指導を受けたりすることができ、無事に商品化できた。その後、講演などの機会に企業に知ってもらい、そこから企業連携ができている。女性で、かつ地方で起業する人は特に、多くの利益を求めるというよりも社会課題をビジネスで解決できないか、という思いの人が多いと思うので、企業と連携するなど、活動や思いを発信する場所があれば大きく成長できる、一歩踏み出せるきっかけになるのではないかと思う。

・もう一点は、女性は出産や子育てでキャリアがストップしてしまうという固定観念が多いのではないかということ。自分自身はこどもを託児所に預けたり、実家やファミリーサポートを頼ったりなど、多くのサポートがあったので、出産前日まで働き、産後もすぐに復帰していたが、それはとても恵まれた環境であったと思う。地域のみんなでこどもを育てるという仕組みができていくと、女性起業家のロールモデルが生まれやすいのではないかと思っている。

・自分が社外役員をしているところでもなかなか女性管理職が増えないので、当事者と意見交換をしたところ、「一旦休職をするとキャリアが継続できないという課題がある」という話があった。そういうロールモデルをつくること、地域で子育てをするという考えを浸透させ、誰もがサポートを受けられるような環境を作っていくことが必要なので

はないか。

（田中氏）

・青森県八戸市の起業の事情について。最近八戸市が起業サポートに力を入れていて、商工会議所と連携しつつ起業・創業のためのコミュニティーを運営したり、新規ビジネス、スモールビジネス、学生起業などいくつかのセクションに分けて起業を支援したりなどしており、それが結構うまくいっていると思う。自分は特にサポートなく根性だけ、という形でやってきたが、当時そういったコミュニティーがあればとても良かったと思っている。コミュニティーから仕事につながることもあるというだけでなく、何か手伝いが必要なときに力を貸しあえる人がいると女性の起業にとって非常にメリットがあるのではないかと思う。また、青森では先輩起業家の話を聞くというセミナーが良く行われており、それがとても良いと思う。大企業でなく、一歩先、二歩先というような小さく起業している方の事例、ストーリーを聞くことによって、自分にも起業できるかもしれないと思える。

・起業したい人、起業後間もない人のコミュニティーもあるが、それとは別に経営者のコミュニティーもある。青森県は特に、世代が上の方が多く、男性経営者がメインになる。すると、30代の女性は珍しいということで、「受付をやって」というような、客寄せパンダのような役割を与えられることが最初は多く、なかなか奥に入り込めないということを何度も経験している。

・スケールは違ったとしても、同じ経営、事業をしているということでもう少し手を組めると良いと思うが、今は完全に起業前、もしくは起業したばかりというグループと、重鎮のグループが分けて設けられてしまっており、そこに課題を感じている。

（山形氏）

・真庭市に移住後、最初の３年間は地域おこし協力隊をしていた。真庭の人は優しい人が多く、「石鹸をつくるならここにいい薬草があるよ」というように、地域の方が色々教えてくれて、こんなに助けてもらえるのであれば起業しようかと考えた。悩みはしたが、当時の地域おこし協力隊の上司にあたる方が、「地方で子育てと仕事を両立しながら起業するモデルを山形さんが作ればよい」と言ってくれたことに背中を押された。商工会などが中心となった創業塾などもあり、そこで事業計画書の書き方や資金のやりくりなど色々教わることができた。それがなければ何もわからない状態だったと思うので、真庭市の創業支援にはとても助けられた。そのほか、地域の古民家では化粧品製造の許可が下りなかったので現在の工房を建てたが、そのときも地元の銀行や地域の方がたくさん応援してくれたので、なんとか起業することができた。

・創業支援は充実していてありがたかったが、一番行き詰まったのは子育てとの両立。自分は東京育ちだったので、習い事もこどもが自分で行くものだと思っていたが、岡山で

は、１時間の送り迎えは当たり前など、地方のお母さんはこんなに大変なのか、と驚愕した。真庭市は人口４万人台の市であるが、少し専門的な習い事をさせるとなると、隣の津山市まで１時間近くかけて連れて行かないといけない状況であり、それでは物理的に会社のことも、家のことも回らない状況になってしまった。ただその時に、地域のシルバー人材センターの方に助けていただいた。その方に家事の手伝いをしていただいたり、子育ての悩みを聞いてもらったり、こどもが不登校のときは少しの間外に連れ出してもらったりなど、とても助けられて、そういった地域のお年寄りが子育てを応援してくれるサービスは非常にありがたいと思った。

・ただ、地域の他のお母さんがそういった制度を利用しているかというと、それほど活用していない。そこには、家の中のことをよその人にお願いするのはハードルが高い、ということがあるのではないかと思った。どうしても「家事は女性がするもの」という考えがあり、狭い地域なので噂になったら嫌だとか、心理的なハードルが高いのではないかと思う。しかし自分はそのサービスがなければ事業の継続はできていなかったと思うので、女性の心理的ハードルがあっても利用しやすい仕組みの家事代行などのサービスは必要だと思っている。

・経営しているMATSURIKAという会社は、自分自身が働きやすい会社にしようと思ったので、子育て中の女性が働きやすいように、ということを第一に考えた。自分やスタッフが退勤後でも配送業者の方に荷物を運んでもらえるようなシステムを考えたり、夏休みにこどもとの時間をたくさん取れるよう、夏休み前にまとめて製造するなどの柔軟な対応をしたりなど、子育てとの両立ができる形を考えて今に至っている。女性の大きなライフイベントとして結婚や子育てがあるが、第１子が生まれるだけで約３割の女性が仕事を辞めてしまうというデータを見たことがある。また、こどもが不登校などになってしまうと、さらに多くの母親が仕事を辞めてしまうというデータも見たことがあり、そういったことが日本全体として抱える切実な課題だと考えている。

（小安氏）

・これまでのサロンも含めての共通の課題として、女性が子育てをすべきだという性別役割分担意識と、意識だけでなく実際に仕組みとしてそうせざるを得ない状況があり、この意識と仕組みを何とかしないといけないということは引き続き共通課題なのかと思った。

・習い事の問題は、様々な地方で女性の就労支援をする中で大きな壁である。自治体によっては、タクシーでこどもたちを送迎する仕組みを自治体が実験的にやっているところもある。また企業によっては、習い事の送迎があってお母さんたちが15時、16時までしか働けず、賃金も上がらず、会社としての売り上げも上がらないという状況があるので、会社の中に地域で人気の習い事を作ってしまおう、という取組を検討しているところもある。

・習い事の問題のように、都市部にいては気づきにくい問題を可視化して、どういったサポートが必要なのかを具体的に議論していけると良い。

（横田氏）
・もう第５回目のサロンであるが、まだまだ新しい話が出てくるということが、サロンを続けている意義だと改めて感じている。

（吉岡氏）
・地方において、他人を家の中に入れて何かしてもらう、というのはハードルが高く、例えば自分の親なども、介護をヘルパーにお願いしようと思っても絶対に頼まない、というようなことがある。ただ一方で、そこにビジネスチャンスがあるのだろうということを再認識した。

○どうすれば女性が働きやすいと思える地域へと変えられるか
（山形氏）
・地方に移住し、見知らぬ土地で周りの人の助けを得ながら子育てをしてきたことを振り返ると、もっと社会全体として、子育てに優しい企業が増えると良いと考えている。
・子育て中の母親のニーズは様々。休日にこどもを預けてネイルサロンに行くのがリフレッシュだ、という人もいれば、こどもと一緒に普段は行けないようなところにランチに行きたい、という人もいるし、こどもの送迎を代行してくれたら一番ありがたい、という人もいる。自分は家事を手伝ってくれる方がいた、というのがありがたかったが、家庭の事情によりニーズは違う。
・既に取り組んでいる自治体もあるかもしれないが、働く母親を支援するための、子育て応援チケットがあったら良いと思う。例えばタクシー会社であればこどもの送迎をする、自分のところのように石鹸を作る会社であれば、ベビー石鹸とお母さんが癒されるような石鹸のセットを用意する、というように、地域の企業に参加してもらうような仕組みがあれば、企業はみな一斉に、「うちの会社だったら子育てに対してどのような支援ができるのか」と考えると思う。そこで、そのサービスと母親たちのニーズが一致してチケットが使われた場合にはその企業に補助金が出る、というような仕組みがあれば、母親もチケットを利用することで普段は受けにくいサービスを受ける心理的ハードルも下がり、地域全体が子育てにやさしい社会になるのではないかと感じた。
・今まで保育所や学童保育にお世話になったり、こどもが大きくなって不登校になったときは登校できるよう学校の先生方にサポートしてもらったり、本当に助けられた。しかし、知り合いには保育所の選考に落ちてしまい働けなかった女性や、看護師の資格を持っているのにこどもを学童保育に預けられず、夏休み期間に働けないという女性もいる。都会ほど倍率は高くないと思われるが、地方でも子育て世帯が多く住む地域では待機児

童が多い。働く女性を応援する最初の基盤として、学校や保育所、学童保育など、例えば資格がない人でも人手不足の現場に補佐的に支援に入れるような体制がもっと充実するなどしたら、ありがたいのではないかと感じている。

（田中氏）

・地域の性別役割分担意識を変えていく何かが少しずつ起こっていったら良いと強く感じている。男性側の意識もそうだが、女性側としても、「自分が家事をしなくてはいけない、自分がこどもの送り迎えをしないといけない」と強く思っている場合が多い。それが必ずしも悪いことではなく、自分が選びたくて選んでいるのであればよいが、働きたいのにそういった固定観念にとらわれてしまっているという場合がとても多いと思っている。

・今はオランダで、こどもも毎日学校に通っているが、青森にいたときは先生からも「お母さんはお母さんらしくあってください」「今週も出張ですか」などと言われ、そういったことに悩んだこともあった。それ以外の企業などでも伝統的な考え方をなさる方に触れてきた。青森はすごく良いところで、いずれ戻りたいとは思っているが、女性が働きやすいか、と言われると。オランダでは、習い事の送り迎えは大体父親がやっている。そういったようなことも皆さんに伝えていきたい。

（大西氏）

・社会起業家の友人が多いが、東京で起業する人が圧倒的に多い。起業するうえで、東京の方が便利で、取引先も多い、というのはあるが、全国にはすばらしい地方、農村がたくさんあり、子育てのことや、農業を頑張っていこう、という気概のある市長などもいる。ロールモデルとなるような自治体をいかにつくって、増やしていくかということが大事だと思う。

・経済も過渡期に来ていて、世界全体としてみると拡大・成長というところだとしても限界がある。そこで、自然と共生する、というような暮らしの在り方など、もっと地方からリーダーシップをもって発信できるのではないかと思っている。そういうリーダーとなる市長がいたり、ロールモデルとなる起業家がいたりして連携していくと、未来に存続できるような地域づくりができると思っている。

・グローバル化の先のビジョンとしてそういったものがあると、未来は明るいと思う。最近は国としても地方創生に取り組んでいて、中央省庁から自治体へ職員を派遣するという事業もある。内閣府の皆さんと自治体、そこにプレーヤーの方が参加して連携することで、ロールモデルが作れると思うので、ぜひお願いしたい。

（池下氏）

・石川県は、男性と女性の家事時間の差が日本一大きい。女性が家事をすること、こども

の面倒を見ることが当たり前。核家族が多い中で、母親がこどもを見ることが当たり前、仕事を休むことが当たり前、という意識がとても強い。

・自分も起業するときに、夫に「こどもが家に帰ってくる時間に家にいるなら良い」と言われた。当時こどもは小学生だったので、15時過ぎにはもう帰ってきてしまう。そのため最初にリクルを立ち上げた時、営業時間は15時までであった。本当は母親たちが自分の仕事が終わってから店に行って制服を選びたいだろうと思うが、その時間に私は店を閉めて帰らないといけない、という状況から始めた。今はこどもも大きくなり、営業時間は延びたが、それでも17時にしている。スタッフのほとんどは母親で、帰ってから家事をしなくてはいけない、晩御飯を作らなければいけない、というような考えから抜けられない。

・そのような状態だと、母親は起業したい、仕事をしたいと思っても、こどもの面倒を見ないといけないから難しい、という女性が多い。そこでリクルでは、家族優先、自分優先、シフト自由、当日の急な休みもＯＫ，夏休みもしっかりとれる、というようなお店作りをしている。儲けたいと思って始めたわけではなく、制服のおさがりがあれば私が助かる、というところからのスタートなので、起業＝ビジネス、お金ということではなく、あくまで自分自身が、母親たちが働きやすい仕事、というところをとても大事にしている。

・私はもともとすごくネガティブで、人の前に立つのもすごく恥ずかしく、一時は鬱になったときもあった。しかし制服のリユース活動を始めて、目の前にいるたくさんの困っている人たちに制服を提供してありがとうと言ってもらえること、誰かの役に立てていると実感できるようになったことが、心の支えになった。その経験から、自分のように心がつらくなってしまった女性たちも、もう一度自分らしく働ける環境を作りたいと思うようになった。今、リクルのスタッフは「家族を大切にしながら人の役に立つ仕事をしたい」という思いを持って集まってくれている。様々な背景を持つ女性たちが働きやすい、働ける場所をつくりたいという思いでやっている。自分らしく働くことと、家族を大切にすることのどちらもを無理なく両立できる社会を目指したいと思っており、私たちの取組がその一歩になればという思いでやっている。

（小安氏）

・女性起業家が増えると、地域にこれまで働く場所がなかった、地域に受け入れられなかった多様な人々の雇用が増えるのではないか。そういったことをデータでも示せると、女性起業家を支援することの意義がより強固になるかと思う。

・CSWでこの間、女性のエンパワーメントの中でGX、グリーン購入の中に女性の力をもっと生かせるのではないかというテーマがあったと聞いている。特に日本の豊かな自然がある地方において女性活躍、女性起業家の創出を推進していくことは、グリーンエコノミー、GXにつながっていくという文脈もあると思った。

（横田氏）

・女性起業家は、自分が働きやすい場所を自分のためにつくり、かつスタッフにも柔軟な働き方を提供できる存在であるので、儲ける、という軸以外にも非常に価値のある存在だと思っている。個人的な試算であるが、女性起業家が30%まで増えれば、150万人くらいの雇用を生み出せると考えている。

・性別役割分業について、社会の意識はそう簡単にすぐには変えられないので、身近な変化を促すことで、自ら挑戦する人たちを応援することが重要だと思っている。

・例えば、大学生くらいまでの男子学生に講演をすると、「こんなに女性が苦労しているなら、自分たちには何ができるか」と聞かれる。そこでは自分のご飯は自分で作り続けてね、と言っているが、学生時代から男女かかわらず、自分が食べていくことくらいはできるようになるだけでも社会はありがたいと思う。

・お話を伺い共通して背景の課題として感じたことは、起業家の応援の仕方がわかっていないということ。ここにいる方は、手を差し伸べてくれる方がいたラッキーな方もいる。応援の仕方は、手伝う気もないのにビジネスモデルを聞くのではなくて、チャレンジすることに対して一言目に「エクセレント」と言ってくれる、クラウドファンディングで少しシェアしたり、1000円出してくれたりするだけでも良い。大西さんがおっしゃったようなロールモデル自治体ができることで、応援の仕方を見せていく、という面でも良いかと思った。

（吉岡氏）

・地方は人が少ないので、二拠点生活のような働き方を増やして、まず地方で働く人を増やす。そのうえで、子育てや介護などをサポートできる仕組みを、大西さんもおっしゃったように自治体と一緒に考えていくことが大切なのだと思う。そうなると、大きい組織で働く人たちの意識も変えることができ、地域の機運が高まっていくのではないかということを考えさせられた。

（三原大臣）

・横田さんがおっしゃったように、まさに女性起業家だからこそ子育てをしている方の様々な働き方を許容し、応援することができると思うので、女性起業家を応援することで、地方の女性たちもわざわざ都会に出ていかずに、地方でも自分が思い描いた人生を送ることができる、という状態に少し近づける気がしている。

・子育てを自治体で、地域でどういうふうに応援できるかというのはずっとついて回る話だと思うが、今日は色々なアイデアをいただけた。そしてアンコンシャスバイアスについては、女性自身がそこにとらわれてしまっているという田中さんの御意見も非常に大切なことだと思った。

・今日頂いた意見もしっかりと政策に落とし込めるようにしていく。

４.閉会